「私とオリンピック」

2021年オリンピック東京大会の終了後、日本スポーツマンクラブの機関誌に、世界空手連盟(WKF)の奈藏事務総長執筆の記事が掲載されました。
タイトルは**「空手悲願の五輪デビュー　次は恒久競技へ」**です。
2021年8月5日から8月7日までの3日間は、日本武道館でオリンピック競技として、史上初めて空手が実施された歴史的瞬間でありました。
形の人気と高い評価は大会前の予想をはるかに上回ったといってもよいかもしれません。しかしながら組手と形ともに判定基準があいまいであることと、審判の表示が複雑であるなどの批判的な意見も多くの方々からいただきました。
基本的には空手ファミリーにだけ受け入れられて理解されるルールから、誰でも理解しやすいルール、試合運営方法への改革が求められています。
さらに空手は2024年オリンピックパリ大会の実施競技からは除外されています。
今後2028年オリンピックロサンゼルス大会と2032年オリンピックブリスベン大会に向けて、「KARATEがオリンピックに与える付加価値」に正面から向き合い、いずれは五輪での恒久競技としての座を確保すべく、あらゆる努力を傾注する所存です。との決意が掲載されておりました。
今後の空手の発展に向けて期待するとともに応援をしたいものです。

(事務局記)

空手の魅力 今こそ発信

身一つで磨く技 老若男女幅広く

スポーツ再興
ウイルスに負けない

世界空手連盟事務総長 奈蔵 稔久氏

代表選考レースについては、すでに実施された大会のポイントを尊重するのが基本線だ

なぐら・としひさ　1946年生まれ。住友商事入社後、千葉製粉専務などを経て2014年より現職。全日本空手道連盟理事。東京五輪の新競技選考時には組織委や企業へのプレゼンに奔走し、16年8月の追加種目入りへ大きく貢献した。

東京五輪で新競技となる空手にとって、今夏は競技の魅力を世界中に発信できるこの上ないチャンスだった。夢舞台は1年先にお預けとなったが、世界空手連盟（WKF）の奈蔵稔久事務総長はこの危機下をあえて好機と捉え、身一つで鍛錬を積める特性や生涯スポーツとしての価値をPRする方法を模索する。

――東京五輪の1年延期が決まった。空手界への影響は。

「WKFが発足したのが1970年で、その年に日本武道館で世界選手権を行った。ちょうど50年後の2020年に同じ会場に戻り、五輪競技として行うのは空手界にとって奇跡のような計画だった。今年、それが実現できなくなったショックはかなり大きい。ただ、世界の今の状況を考えると延期は妥当な判断。21年、また同じ日本武道館で大会を迎えられたらと願っている」

――延期をうけて保留となった代表選考方法はどのように見直すのか。

「国際オリンピック委員会と交渉中だが、基本線は、20年に東京五輪が実行される場合のルールに戻る。18年から始まった代表選考レースについて、すでに実施された大会のポイントはそのまま尊重される」

「（新型コロナウイルス感染拡大の影響で）中止となったレース終盤戦、3月のプレミアリーグ・ラバト大会（モロッコ）と欧州選手権は来年同時期に復活する。当初、5月に開催予定だった最終予選も2大会終了後に行う案を出している」

――11月の世界選手権（ドバイ）を始め、すでに予定された大会は前哨戦の意味合いを持つことになる。

「伸び盛りの若い選手の戦い方が面白くなってくる。日本は開催国として代表枠を確保するが、海外勢は出場権を獲得する瀬戸際の国もあったはず。各選手が（ランキングで）好位置につけて選考レースを迎えるためのアピールの場になる」

――欧州でも空手は人気だ。コロナ禍での各国の練習環境への影響は。

「最悪のスポーツの状況下では、空手はかなりの練習ができるというのが一つの特徴だ。組手はどうしても相手とやらなければいけない場面もあるが、形は本番に近い形式で能力を発揮できる。（女子形・世界ランキング1位の）サンドラ・サンチェス（スペイン）をはじめ、多くの選手がSNS（交流サイト）で練習方法をシェアしている」

――24年パリ五輪では空手が実施されない見込みだ。東京大会で成功させることで存続へアピールするつもりだった。

「追加競技の決定時期は（当初の）12月から変わると聞いている。スケジュールが決まってから我々も動きを考える」

「昨年ごろからWKFは競技性だけでなく、生涯スポーツとしての空手の価値を発信し始めた。子どもから老人まで楽しめ、達人としての空手があれば、健康法としての空手もある。プロモーションビデオを作るなどして国際大会やSNSで競技としての幅の広さを強く訴えかけ、この1年を空手を盛り上げるための良い機会としたい」

（聞き手は堀部遥）

＝随時掲載